

待ち遠しいコラムというものはある。さしずめ山崎行太郎の「月刊・文芸時評」（月刊日本）はそんな一つだ。4^六といふ小さなスペースながら、文芸に限らない話題を幅広く取り上げ、ものごとを考え抜くことの楽しさと端正さを示してくれている。その姿勢がまず反時代的である。

「二万人の死者たちとどう向き合うか？」（月刊日本のみ5月号）は、大震災と原発事故とによって浮かび上がった現代日本の絵図を、一つは国家と個人との間を埋める中間団体（共同体）の意想外の弱体化として、さらにはとりわけ文化人といわれる人々に顕著な幼稚性、思想的貧困として描いたあと、そんな時代の思想の責務を、小林秀雄の区分「死んだ子供」と「子供の死」を引きながら突き詰めてゆく。

母親の心を打ち砕くのは抽象的な「子供の死」ではなく、ありありと目に浮かぶ「死んだ子供」の顔。思想は死一般ではなく、具体的な死者と格闘せねばならない。「死んだ子供」の顔は、キリスト教、マルクシズム、プラトニズム…などどんな出来合いの思想の網からもすり抜ける。それでもなお「死んだ子供」の顔を掬い上げるには、どうすべきか。まして「二万人

「死んだ子供」と「子供の死」

の死者たち」。山崎にも吹っ切れた回答（救い）があるわけではない。せめて手垢にまみれたイズムの言葉を語るよりは沈黙、ぐらいいいかいえない。

当然ながら今月号には震災、原発関連の論文があふれた。今述べた山崎の論旨を多少偏光拡大して当てはめてみると、おのずと2大別されるように思われる。なるべく個別具体的な事例や思いに寄り添おうとする視線と、個別具体的なものをより大きな言葉（概念）や視野の中に収めようとするものである。さらには、当然前者の方に心に届くものが多い。

玄田有史「釜石の火は消えない」（文芸春秋）は、震災以前から「希望の社会科学（希望学）」プロジェクトの調査で釜石を20回以上も訪れたという玄田が、あらためて旧知と言葉を交わすなかで、一人一人の「希望」を軸に必ず復興は実現するだろうことを、これは正直、祈念するエッセーである。「希望学」の定義と実態は不鮮明ながら、個人の心理レベルだけではなく、社会全体の機能においても、希望は重要な役割を果たしていることを定量化する学問だろう。随所に住民自身の気持ちを最大限尊重すべく、（政府からの方針も）「被災地への一方的なおしつけになることがあつ

てはならない」「強権的な『収用』でなく、粘り強い地道な『対話』が求められる」などのことが強調される。

都市計画史の越沢明「復興は時間との勝負である」（中央公論）も、今回の被災地が神戸と異なり高齢化の進むいわゆる限界集落を多く含む事情を考えると、10年先の理想的な復興よりも、迅速なる復旧、せめて5年先を目指すべきだということ。いっとき「復旧よりも復興」などの美辞がいわれたけれど、たしかにそうだ。船頭多い復興構想会議の提言が6月末に出るのを待って、などの愚は最も避けなければならぬ。

一時期、日本でも新聞を賑わした中東革命。今では報道量もめっきり減った。加藤博「アラブは『近代』を克服できるか」（世界）は、チュニジアから始まる一連の中東革命で、民衆動員のシンボルに「イスラム」（信仰）が掲げられなかったことに注目する。植民地時代以来、中東諸国にとって近代はつねにトラウマであり、だからこそ宗教による近代の克服（イスラム革命）も試みられたが、グロバリゼーション、情報化におしなべて地ならしされてしまった今、近代の克服は何を軸に行われるのか。